

ふるまいの時代のセカンドハウス



flat class architects 一級建築士事務所
渡辺圭 + 山梨綾菜



略歴

渡辺 圭

1979年 ニューヨーク生まれ

2004年 早稲田大学大学院修了

2005年 kw+hg アーキテクト 勤務

2018年 flat class architects 設立

山梨綾菜

1988年 福島県生まれ

2012年 前橋工科大学大学院修了

2012年 aat+ ヨコミゾマコト建築設計事務所勤務

2014年 kw+hg アーキテクト 勤務

2018年 flat class architects 設立





- ・ 趣味性に特化した住居としたい
- ・ 地域の人との接点となるような場所を作りたい
- ・ 大学の友人たちと集まれる場所にしたい
- ・ SNSなどで知り合った人たちとリアルで集まる場所にしたい
- ・ 将来的にペット可の民泊などに使えることを視野に入れたい
- ・ 自らの終の棲家としたい
- ・ 可能な限りローコストでつくりたい

主要用途：個人住宅

家族構成：夫婦 2 人

犬 2 匹

敷地面積：193 m²

建築面積：57 m²

延床面積：88 m²

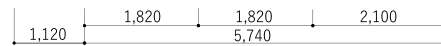
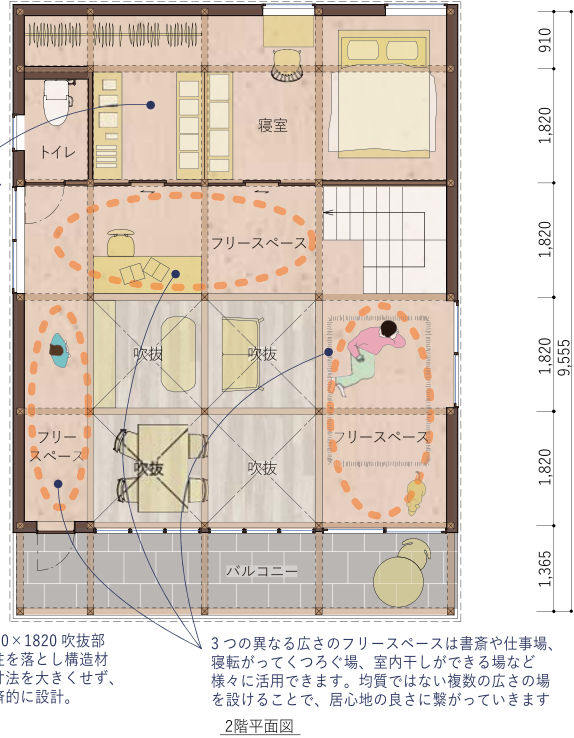
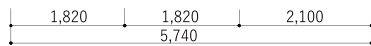
構造：木造

階数：2 階

武漢で原因不明の肺炎が蔓延し始めたころ、ひとつの依頼が舞い込んできました。秩父にある祖父の家があそんでいるため、すでに所有している戸建て住宅とは別に、セカンドハウスとして建替えたいというもので、上記のような要望がありました。何度か話を聞いているうちに社会的にコロナが蔓延し、依頼者夫婦もリモートワークするようになりました。

セカンドハウスには仕事場としての側面も増え、アフターコロナの社会の中で、如何に働き、集まり、生きていくのかということテーマとしてセカンドハウスを計画しました。個人の手の届く小さなコミュニティのひとつのかたちになることを望みます。

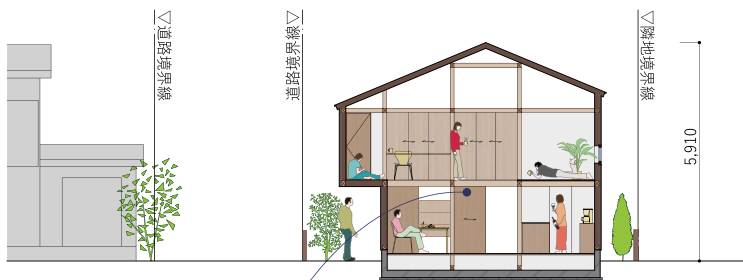
柱梁を1820mmグリッドでしつらえることでヒューマンスケールの骨組みがゆるやかに居場所を創る計画です。構造材を活かして収納やパネルを付け加えていくことで更新性が広がり、日曜大工で簡単に家具が増やしているような想定をしています。



平面図

ローコストに抑えながら身体的スケールに呼応させることを意図し、1820mm モジュールとしました。断面的にも1820mmで積み重ねることで、大きいジャングルジムのような構造としています。

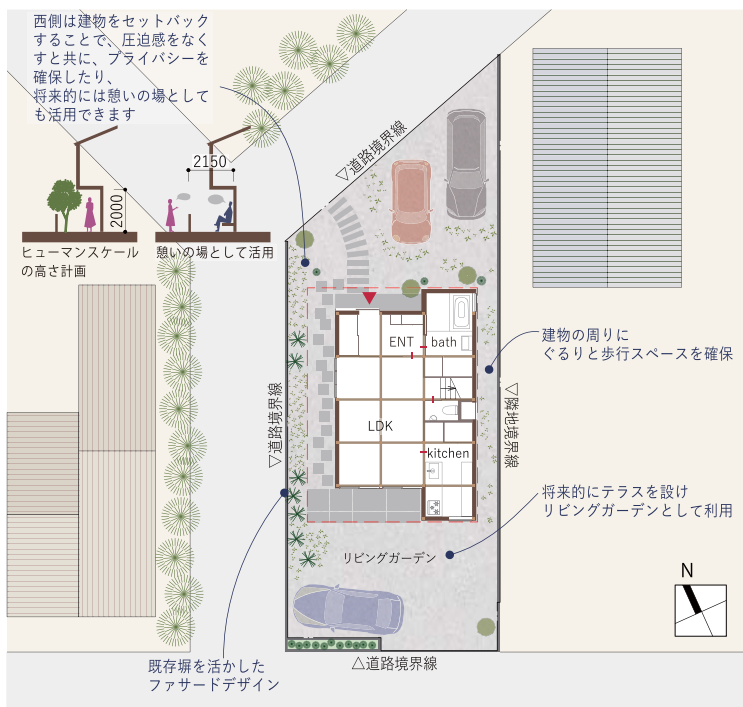
吹抜を通して構造が立体的につながることによって、家全体が屋根裏の小屋組みの中にあるような空間となっています。ここでは、2階からの光がこのジャングルジムを通して影を落とし、風が通り抜け、柱がひとの拠り所となってふるまいに影響を与えます。ローコストで住宅を実現させるため、まず初めに骨格を作り、徐々にDIYで好きに作り足してゆく、緩い建築をめざしました。住まいながら作り、作りながら住みます。



家の中心の吹抜けから上下階が交差して気配を感じられます。1階は天井高さが低いところと高いところがあり、落ち着く場所や開放感のある場所、といった様々な場が生まれます。



2階吹抜まわりのフリースペース



西側は建物をセットバックすることで、圧迫感をなくすと共に、プライバシーを確保したり、将来的には憩いの場としても活用できます

ヒューマンスケールの高さ計画
憩いの場として活用

建物の周囲にぐるりと歩行スペースを確保

将来的にテラスを設けリビングガーデンとして利用

既存壁を活かしたファサードデザイン



1階リビングからの見上げ階高を抑えることで視覚的・感覚的に2階と1階が近づく

断面図・配置図・模型写真

建物は敷地中央にコンパクトに配置することで建物周囲に地域との距離感の違う余白を作りました。この余白は既存の低いブロック塀に導かれるようにしてぐるりと一周繋がります。駐車場やアプローチ、軒下の半外部空間から日当たりのよい広場へ。内部は水回りを1階東側に集約し、そのほかは吹抜のある大きな伽藍洞としています。大人数で集まれる1階のリビングの周りを、吹抜を介してフリースペースとバルコニーが取囲みます。このフリースペースは仕事場にも趣味の場にもなりますし、友人たちの寝床にもなります。パブリックに集まりにくいアフターコロナの社会の中で、自らの生活の拠点とは少し違うハーフパブリックなスペース所有することで、共感をもつ人たちと過ごす場所をシェアすることができます。

街路のホテルリノベーション



主要用途：ホテル
既存用途：寿司屋
敷地面積：136.00 m²
建築面積：100.73 m²
延床面積：302.19 m²
改修面積：182.55m²
構造：鉄骨造
階数：3階

創業 60 年の寿司屋に幕を閉じ、海外からの観光客の宿泊施設として改修するプロジェクトです。京成立石駅の仲見世商店街からほど近い、再開発事業の区域内に位置しており、昼間から商店街で飲み歩く人の風景が一種の風物詩になっています。既存の建物は宴会場として利用するための複数の和室から構成されており、これをホテルとして再生するため、どのようにして要件・デザインを更新するのが主題となりました。立石の商店街の雰囲気を引き込み、外部の路地がそのまま続いていく体験を想起させることで、旅行という非日常感をホテルの中に取り込めるのではないかと考えました。既存の黒石張りの柱、玉砂利床は残し、新しく構成する宿泊スペースを白で対比させることで、既存の空間と新しさを融合させることを試みました。



既存の障子と新しいすだれでゆるく囲われたリビング

このホテルはワンフロア約 100 m²を 6~8 名の一組に貸し出すことを想定しています。みんなで集まれるリビングはもちろんのこと、キッチン・大型冷蔵庫・洗濯機・乾燥機も完備しており長期滞在することもできます。

アフターコロナの社会で宿泊施設は一様に苦境に立たされていますが、今回計画したような大人数用の滞在型宿泊施設は、家族だけでなく、気心の知れた友人たちと数日を共有することのできる稀有なビルディングタイプになると考えられます。

従来のホテルとしての宿泊機能を超えて、ハーフパブリックに集える場所を提供することで新たな共有空間が生まれることに期待します。